

令和八年度
名寄市立大学
学校推薦型選抜・社会人選抜

小 論 文 問 題

試験時間 一〇時〇〇分～一一時三〇分（九〇分）

*受験上の注意

- ① 指示があるまで開いてはいけない。
- ② 指示に従って、静粛に行動すること。
- ③ 机上には、受験票、HBの黒鉛筆またはシャープペンシル（シャープペンシルの芯はケースから取り出したもの）、消しゴム、鉛筆キャップ、鉛筆削り、時計、眼鏡、目薬、ハンカチ、ティッシュペーパー（袋・箱から取り出したもの）以外、不要な物は置かないこと。
- ④ 質問、用便その他、特に必要のある場合は黙って手を挙げ、指示を求めること。
- ⑤ 不正を行ったものは試験を中止し、以後の受験資格を失うものとする。

次の文章を読み、あとの問に答えなさい。

年のせいと笑われているのだが、この頃、弱い、卑怯な日本人が増えたような気がしてならない。そういう人々の多くは、健康状態も申し分ない。外見もいい。教養や学歴も充分。親も良識ある家庭の人たちである。それなのに、そこに育った若い世代は、いつも及び腰で、周囲に文句ばかり言っている。

一番おかしいのは、或る金融機関に勤めている若者なのだが、職場そのものが、期待を裏切ったのだという。彼がどのような期待を持って、金融界に入ったのか、私にはもちろん知る由もないのだが、少なくとも経済そのものについて全く知らない私などと比べると、理解力も他の広範な知識もあり、はるかにその仕事に向いていると思われるから、その一流銀行を受験して受かったのだらうと思う。

しかしどんなに事前に会社訪問をしても、職場や取引先の人間関係については、誰も就職前から、熟知するということは不可能だ。

隣席の男がお節焼きかトカゲみたいな冷たい人間か、上役がどんな隠れた酒癖を持っているか、経営陣が作る職場の空気がほかと比べてどんなものか、恐らくすべての職場の人たちは、事前には知らないで就職するだろうと思う。

ということは、他の職場にあることは、自分の職場にも可能性があるということだ。銀行に就職したと思ったのに、銀行が突然、旅行会社を始めたというのなら、少しは問題かもしれない。世の中には、飛行機に乗ることだけは怖くて避けたいと思っている人がいて、その人が一月に十回も飛行機に乗るような状態に置かれることは、確かに「合理的」でない。しかし金融業が、ともに金融の仕事を続けているなら、そこで働きたいと言った人は、相手が自分を裏切ったという筋合いではないのである。

もっとはつきり言えば世間全体が、さまざまな人間のもたらす偏った性格で動かされている。そんな単純なことさえわからない人が、難関を通して、一流大学を卒業し、世間の就職希望対象企業の順位で、一、二を争う有名銀行などに入るといことの方が問題を孕んでいる。つまり学問はできても、人間を理解していない人が職場に入ると、気の毒に当人は少しも満足せず、周囲がことごとく不満の種で、しかも自分は、世間と他人から実力を評価されていない不幸な人生を歩み始めてしまったと思い込むようになる。ほんとうにお気の毒なことだ。こうした不幸な人の特徴が、この頃私には読めるようになった。そういう人の特徴は、ことごとく「他罰的である」といことなのである。自分のせいでこうなった、のではなく、何でも他者が悪いのである。

もつとも、他罰的という姿勢は最近の若い世代の流行だ。部長がこういう点を見ていないからだめだ。課長がばかだからだめだ。会議の席で、自分のことを、誰それがこんなふうに見て無視したのが許せない。それでやる気を失った、と、他人が自分の不運の原因であると立証することを、少しもやめない。

こういう人は、陰気な顔をしているので、私は初めうつ病的で、自信を失っているのかと思っていた。しかし現実には全く反対で、実は意気軒昂^{いきけんこう}、自信にあふれ、心理的姿勢はひどく攻撃的なのである。だから「お元気なんですねえ」と私は言ったことがある。私は三十代に鬱々^{うつうつ}として楽しめない数年を体験したが、その時は、自信なんか全くなかった。他人が自分を無視していると思う前に、自分が消え入りそうであつた。

他罰的であると同時に、そういう人には、感謝が全くないことも大きな特徴である。人も羨むような立場にいる自分の幸運など少しも感じない。出世が早くても当たり前。羨ましがられても当然。会社は「さらにもっと」手厚く自分を遇するべきだ、とさえ言いかねないような思い上がり方をしている。

こういう人物は、しかし多分、意識下では恐ろしく自信がないのではないかと思う。今まで、学歴やその他で、世間が自分を誤解しているほどには、優秀な仕事のできる人間ではない、と薄々知っているのだが、その現実を正視するのが辛いから、決して自分の全身が映る心理の姿見の前には立とうとしない。

それで遮二無二^{しやにむに}に現状に満足せず、自分はもっと大切に遇されて当然と文句を言うことで自分を支えている。それが劣等感の塊である証拠なのである。

（「人間にとって成熟とは何か」 曾野綾子著 幻冬舎新書 二〇一三年より）

問一 傍線部「周囲に文句ばかり言っている」に関して、そのような人間の特徴について、筆者の考えを二〇〇字以内で説明しなさい。

問二 自分の不運の原因は他人や周囲の環境にあると考えることにに関して、あなたが考えることを六〇〇字以上八〇〇字以内で述べなさい。